

ある老人ホームの
出来事

休

暇

村

の
人
び
と



佐々木章一

に、三世代の交流や社会活動
への積極的参加を呼びかける
相手が立ちふさがった

晩聲社

ルポルタージュ

叢書

13

ある老人ホームの
出来事

休暇村 のびと



佐々木章一

晩聲社
ルポルタージュ
叢書 135

著者■ささき・しょういち■

1908(明治41)年、千葉県生まれ。

早稲田大学文学部卒。

休暇村の人びと

ルポルタージュ叢書13

1979年3月20日 初版第1刷©

著 者 佐々木章一

装 幀 杉浦康平＋鈴木一誌 協力＝重田 曜

発行者 和多田進

発行所 株式会社 晩聲社

〒101 東京都千代田区神田駿河台3-2 山崎ビル

電話 (03) 255-4014/0030

振替・東京 6-50696

印 刷 福音印刷株式会社

製 本 ナショナル製本

用 紙 共和洋紙店

＊ 定価はカバーに表示してあります。乱丁落丁はお取り替えいたします。

休暇村の人びと・目次

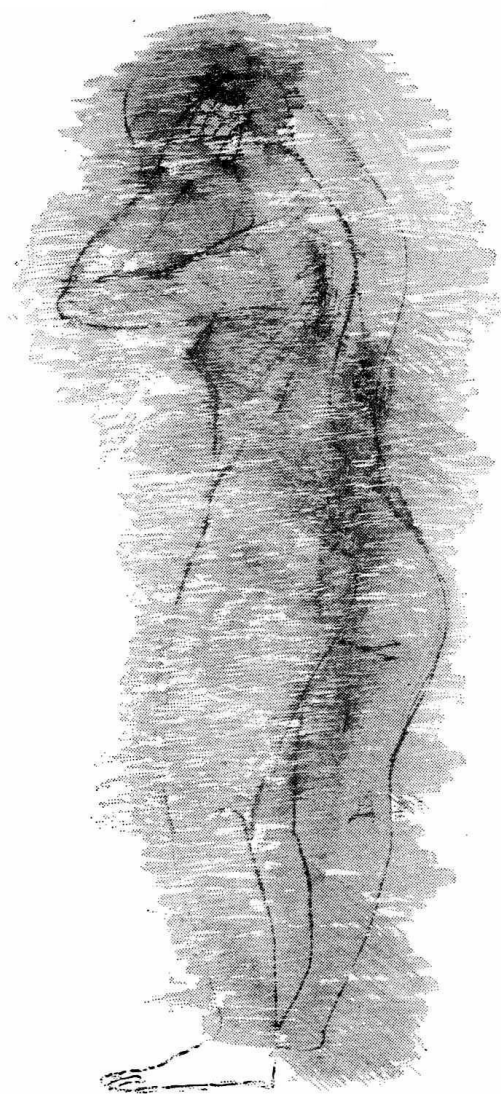
面接日	6
入居者心得	12
退去第一号	24
アル中患者か	30
俳句会の人たち	40
健康法いろいろ	54
老棟色模様	62
所長と栄養士の関係	78
電子ゲルマン・シャワー	88
退所する人びと	94
変死者	116
休暇村の風俗	132
分裂病の老人	150
老人は枯木です	168

老人の恋	182
夫婦棟事件	196
自殺者	204
所長追放	212
退所日	240
後記	246

休暇村の人びと

——ある老人ホームの出来事——

面接日



「この休暇村というのは、いわゆる老人ホームではありません。親と子と孫、つまり三世代の交流をモットーとして、家族はもちろん、社会とも交流をつづけながら、老人に生き甲斐のある生活を送ってもらおうという目的でつくられた施設です。そういう意味では、全国でもはじめてのテスト・ケースですから、各地から参観者がたくさんきておりますし、わざわざ外国から見学にくる人がいます。なかには、まるでマンションのようだとか、少しぜいたくすぎるなどと言う人もありますが、ここでは、従来の底辺的な老人ホームのイメージをすっかり拭い去ろうとしているわけなんです。つまり……」

おそらく、すでに何十回も同じ説明をくり返してきたとみえて、所長の話にはよどみがなかった。その日は入居希望者の面接日で、三カ月以上も前に申請書を送り、書類選考の結果ようやく呼び出されたのだから、入居の動機などについて、相当突っこんだ質問を受けるものと覚悟してきたのに、むしろ施設の宣伝と思われるような説明がつづいた。

つまり、書道、俳句、手芸、舞踊、園芸などのクラブ活動は自主的に運営されているが、それぞれの行事や活動を通して、地域の老人たちとも交流を図る計画であること。休暇を利用したずねてくる家族や友人のためには、宿泊、娯楽の設備もあり、費用は一般ホテルやレストランの半値程度だし、なだらかに緑の起伏する四万坪の広場には、ほかに体育館、集会室、宴会場、テニスコート、プール、ゴルフ練習場などもあること。また、社会活動に積極的に参加するという建前から、外出・外泊は自由であり、現に、会社の嘱託や非常勤の役員で、ここから通勤している者もあること。当初、この休暇村の計画が発表されると、全国から申込者が殺到したが、各地方の福祉事務所などからの要望もあって、多少予備の枠を残

し、現在約一〇〇名が入居中で、目下残り八〇名の選考を進めているということ。

所長がそういう話をしているところへ、胸に「事務長」という名札をつけた男が入ってきて耳打ちをした。

「わたしのお話はだいたいいすみましたから、あとは入居の手続きなどの細かいことになりましたが、ひとつ事務長からお聞きください」

何かの用事で所長が中座したので、今度は事務長と向き合うことになり、保証人として同席している二人の娘を紹介した。

「遠いところをご苦労さまでした。保証人の方にも、ご家族の方にも、この方針をよく理解していただきたいと思ひまして、わざわざ皆さんにお出で願ったようなわけです。ここでは、特に家族との交流ということに力を入れておりますので、ご家族の方には、必ず月一回はきていただくように申しあげております」

事務長は、入居申請書に添えられた戸籍謄本、履歴書、身上書、財産調書、身元引受書、健康診断書などを見ながら、やがて入居の動機にふれてきた。

「環境の悪化と家庭の事情となっておりますが、これは？」

「はあ、家から五〇〇メートルぐらいの所を環状八号線というのが通っているものですから、最近はずます交通量が多くなりまして、空気汚染がひどくなりました。それから家のすぐ南側にアパートができてまして、日当たりが悪くなりましたので、冬などはすっかり暮らしくくなりました。それから、家庭の事情と申しますのは、家内が二年前に亡くなりまして、娘二人と私だけになりましたから、娘たちが結婚すれば、早晚独りぼっちにならなけ

ればなりませんし、ちょうど会社のほうも先々月やめましたので、このような機会に入居させていただければ幸いです……」

「ああそうですか。お二人ともまだ独身でしたね。それでは、もうそろそろ縁談のほうもな、んですね」

「はあ、それがどうも、なかなかはかどりませんで……」

「ここへこられる方のお話をうかがっていますと、経済的には何の不自由もないけれど、若い者との間がうまくいかないとか、お嫁さんとの間がしっくりしないとかいうようなケースが非常に多いですね。お宅などはいかがですか」

「世代間断絶なんてよく言われていますが、うちの場合は思想的な対立のようなものはありません。もっと端的なことで、食事の好みの対立、これが一番大きいと思います。なにしろ、三〇年間も亭主関白を通してきて、家内が亡くなってからもその惰性でいこうとするものですから、すっかり嫌われてしまっています……」

事務長は書類の中から診断書を抜き出して、われわれにはこれではよくわからないから、この近くにある協済病院で精密検査を受けるように、と言った。その院長は、毎週休暇村へ検診にくる嘱託医であり、入居者選考委員も兼ねているそうだ。特に「官公立の医療機関で調製した健康診断書」と指定しておきながら、それを信用しないような態度は納得できなかったし、そればかりではなく、院長が入居者選考の委員であるという補足説明には、強制的な圧力が感じられた。

「人に伝染する病気とか、食餌療法の必要な病気を持っている人は入居できませんから、念

のために検査していただくわけです。もし、異常がなければ入居決定ということになりますから、検査の結果がわかり次第お知らせします」

そう言って病院へ持参する用紙をよこしたが、それには、尿、血液、心電図の欄に丸印が記されていた。それで結局、翌日改めてT市へ出直して、指定された病院で精密検査を受け、その結果の通知が届くまで二週間、待たされた。

もともと公害都市からの脱出ということは、妻の存命中からの宿願で、「死ぬときぐらいはきれいな空気を吸いたいから」と人にもよく話したものだ。妻との死別によって、その気持はさらに拍車をかけられた。その気持とは、古風な表現で「世をはかなむ」と言い換えるのが一番しっくりしているように思われた。動乱期の人たちを出家遁世に誘った気持が、身近によりみがえってきたからである。

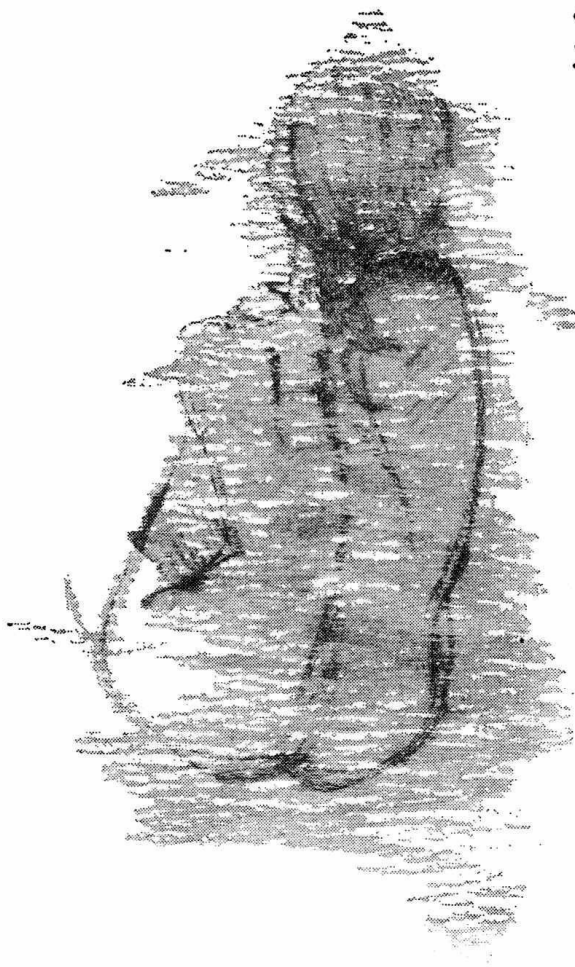
ところがいま、この公害社会から老人ホームへ避難しようと、出版社の囑託勤めをやめた六六歳の男の前に、三世代の交流や社会活動への積極的参加を呼びかける相手が立ちふさがったわけである。乱世からのがれようとするものを、乱世に立ち向かわせようとする立場とでもいうのだろうか。そんなストイックで偏狭な「強者の哲学」にはどうにもなじめない。老人を老人だけの社会に閉じこめて、一般社会から絶縁すれば、倦怠感や無力感をつのらせて老化を速める結果となる——というような公式論を鵜呑みにするわけにはいかない。老人ホームにだって電話もあるし、新聞もテレビもある。隔離された社会とか閉鎖された社会などは、観念的にしか存在しないものだ。

情報公害からのがれたい人にとっては、そういう観念的な社会が理想の棲み家であるかも

しれない。しかし、自分はそんな理想社会に住む前に、まず何よりも、汚れ、疲れ、傷ついた「考える輩」として静かに休息したいのだ。弱者としてその痛手を癒したいのだ。孔子だって言ってくれたではないか、「老者はこれを安んぜん」と。しかも、規定の料金を支払って住み込むのだから、だれにも気兼ねはいらないし、だれからも責められる理由はないではないか。

こんなふうに、自分を説得したり、居直ってみたりしながら、とにかくT市郊外の「休暇村」に入居することになった。

入居者心得



国道に面して櫓の大木が二本、自然にできた門柱のように立っている。その門入って、両側を木立におおわれた舗道を一〇〇メートルほど行くと、突き当たりに「T休暇村」の本館がある。本館に沿ってまた一〇〇メートルばかり、だらだらと坂を下ると、五階建の白い建物有三棟、縦に並んでいる。それに平行して一階建の付属建物がつづき、その入口が「入居棟」の管理事務所になっていた。

ところがその事務所の前に、私の引越し荷物を積んだトラックが着いても、まだ部屋が決まっていなかった。事務所の職員が相談している間、苦々しい第一印象にたえながらかなり待たされた。あとからわかったことだが、看護婦と栄養士と調理師を除く職員は未経験者の寄せ集めのため、何かにつけて非能率的で、このような手違いが起こりがちだったようである。

ようやくA棟四階の東端の部屋に案内され、その鍵を渡された。運送屋は手際よくエレベーターを使って、荷物を部屋に運び上げた。一足おくれて電車で駆けつけた娘たちが荷物を解き、ざっと整理して部屋を掃除した。部屋といっても六畳に、玄関、台所、便所、そしてパンフレットには誇らしげに記入してあるサンルームとベランダ、実物を見ると苦笑するような小空間である。

娘たちの用意してきた品物を配りながら挨拶回りをして驚いたのは、四階一四室のうち、空室がまだ六室もあったことである。所長の話によれば、入居の申込みが殺到しているはずだったが、これでは昨日現在で半分しかふさがっていないことになる。しかし、他の階や他の棟ではこんなことはないのかもしれないと考え直した。

事務所からインターホンで予告されてあったとおり、五時の夕食を知らせるチャイムが鳴ってから食堂へ行くと、事務長がマイクを持って待っていた。

「本日は新しく入居された方が三名ありますのでご紹介いたします。まず、こちらにいらっしゃいますのがA棟の四一四号室に入居された佐々木章一さんです。どうぞよろしく願います」

そのとたん、約一〇〇名といわれている人びとの拍手がいつせいに起こった。これにはまったく面喰らってしまい、私は反射的に「よろしく願います」と呟きながらあわてて頭を下げた。マイクは事務長が握ったままなので、挨拶の言葉をしゃべるかどうかと迷っているうちに、次の人の紹介に移った。やはり部屋の番号と姓名を知らせるだけで、年齢、出身地、前歴などにはいっさい触れない。二人とも七〇代の女だった。女の平均寿命が男よりも延びているので、入居者の割合も三対二で女の方が多いとのことだった。

食卓に案内されて自分の席に着いてみると、同じ階の人たちが五人ずつ向き合い、一テーブル一〇人のグループになって、食事していた。それぞれの左端に自分の名札が貼り付けてある。

「ほんとうにお若いですねえ。さきほど部屋へご挨拶に見えたときは、入居なさる方の息子さんとお孫さんだとばかり思いましたわ」

筋向かいに座った老女がそう言った。すると、相槌を打つ声が周りから起こった。

「まだお若いのにね……」という声も混じっていたが、同情的なのか批判的なか推察しかねた。